

海外研修レポート

イギリス（ロンドン）～フランス（パリ）

2026年6月4日～2026年6月10日

2026年6月30日

サンキャスト株式会社



当社では、ブランド理解と提案力向上を目的として、ロンドン・パリでの海外研修を実施しました。

本レポートでは、現地での体験を通して得られた学びと、今後の空間・提案づくりへの示唆をまとめています。

○研修の目的

欧州の一流施設に学ぶ「高品質な運営を支える仕組み」

本研修の目的は、単なる建築・デザインの視察や感想の共有ではなく、
欧州の文化施設・商業施設が「なぜ大規模でありながら高品質な運営を維持できているのか」を、
"運営構造"の視点から体感し、読み解くことでした。
現地を訪れ、人の流れ・空間の使われ方・接客の在り方に触れることで、今後の提案において
「何を優先し、何を守るべきか」を判断できる視点を養うことを目指しました。

○訪問地と着目点

本研修では、歴史と文化が異なる二つの都市、ロンドンとパリを中心に視察を行いました。

数ある施設の中でも、多くの人が集まりながらも高い品質を保ち続ける

「美術館・博物館」と「百貨店・商業施設」に対象を絞っています。

単に建築やデザインの美しさを見るのではなく、それぞれの施設が

「なぜ大規模でありながら高品質な運営を維持できているのか」という"運営構造"に着目しました。

特に、ファサード・エントランス・フロア構成という3つの視点から、その背景にある工夫を読み解いています。

○概要

“海外研修を通して「空間」ではなく“運営構造”を学ぶ”

■全体仮説

欧州の文化施設・商業施設は、単に優れたデザインや建築によって成立しているのではなく、人・物・情報を整理しながら、大量の来館者がいても破綻しない状態を維持する「運営構造」によって成立している。

■なぜこの仮説を立てたのか

日本では、「デザイン」「施工」「素材」「ブランド力」に目が向きやすい。しかし実際には、それだけでは長期的・大規模・多人数運営は成立しない。本当に重要なのは、「高品質な運営を維持し続ける仕組み」ではないかと考えた。

■本研修で確認したいこと

各施設において、①ファサード、②エントランス空間、③フロア構成と展示 に着目し、その背景にある運営構造を分析する。

■運営構造の分析視点

施設や商業空間が来館者・利用者に対してどのような体験を提供し、運営効率を高めているかを分析するため、以下の6項目を「運営構造」と定義する。

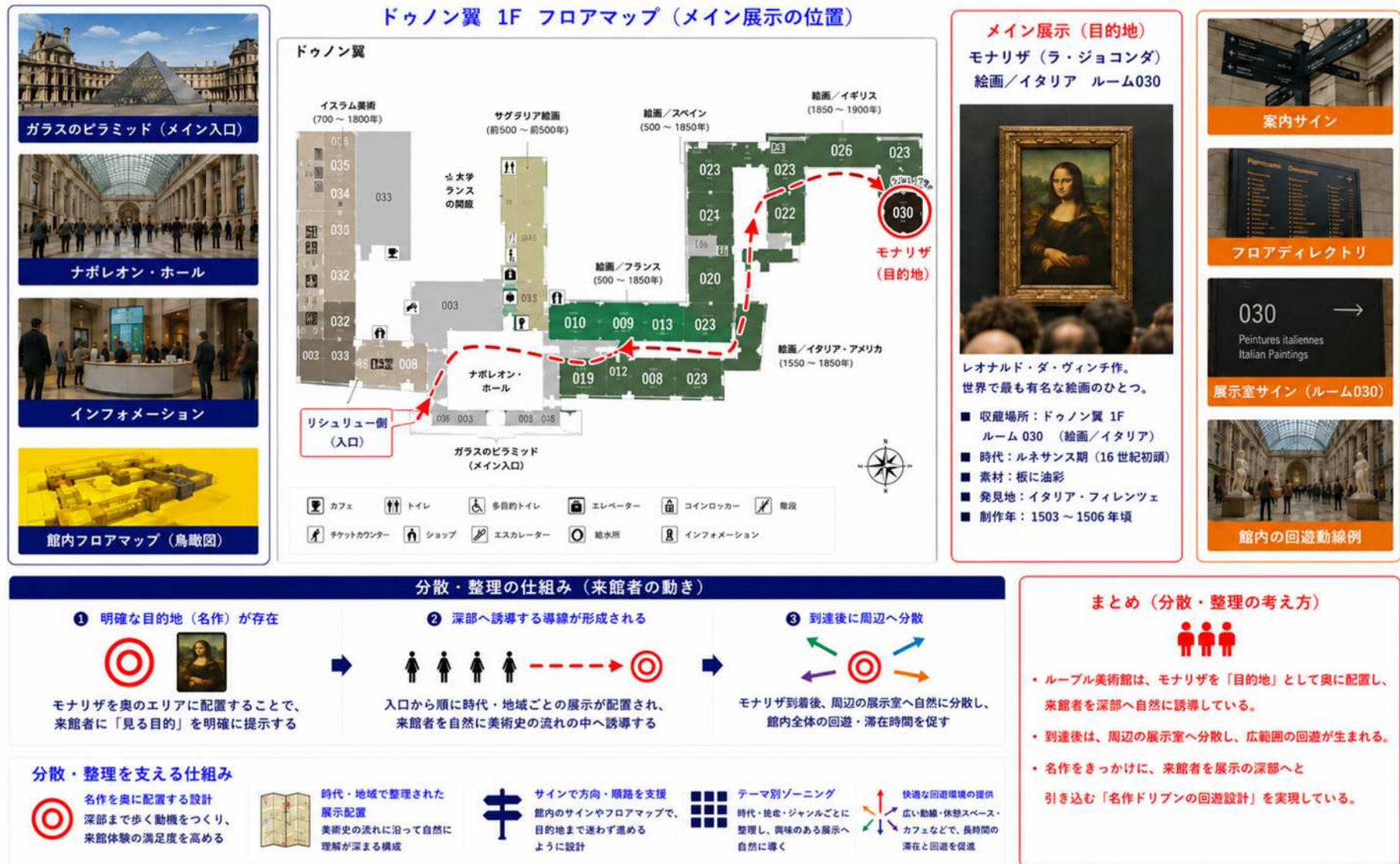
- (1) 導線（人の流れ）
- (2) レイアウト（配置計画）
- (3) サイン（POP）
- (4) 案内板
- (5) フロアレイアウト
- (6) 空間設計

上記（1）～（6）について、各施設がどのような工夫を行っているかを考察する。

○③フロア構成と展示 → 検証結果：ルーブル美術館（パリ）

③ フロア構成と展示（メイン展示の位置づけ） ルーブル美術館（パリ）

名作を目的地として導線を形成し、到達後に分散・回遊を促す構成になっている



来館者は「目的地へ誘導され、深部へ引き込まれた後に分散・回遊する」流れで行動していた（目的地誘導型）

○③フロア構成と展示 → 検証結果：セルフリッジズ

導線設計型：シューズギャラリーにカテゴリを集約し、試着・滞在を起点に“比較しながら回遊”させる構造

カテゴリ集約・滞在装置



シューズブランドを一箇所に集約し、
試着用の椅子が滞在を生む

売場構成・横回遊



同じカテゴリ内にブランドが密集
→横に移動する構造



カテゴリ表示・サイン



サインはシンプルだが、天井表示と案内板で補助

分散・回遊の仕組み（来店者の動き）

① 目的流入
靴・ブランドなど
カテゴリ目的を持って流入

② カテゴリ集約
シューズギャラリーに
複数ブランドを集約

③ 滞在・試着
椅子に座って比較し
売場内に滞留

④ 横回遊
ブランド間を移動しながら
比較・購入へ進む

分散・整理を支える仕組み：

シューズギャラリー

試着用椅子

カテゴリ集約

天井サイン

ストアガイド

来店者は「特定カテゴリに集約され、試着・滞在しながらブランド間を横回遊する」流れで行動していた（導線設計型）

○共通構造

■共通構造

- ① 入口で期待形成（興味を引き込む）
 - ② 中央で分散（視線・滞在による分岐）
 - ③ ランドマークで回遊（目的・視線・テーマ）
- ＋ サインで補助（迷わないための支援）

■人はどのように動かされているか ー空間における行動設計ー

- ① 入口で期待形成 ＝ 入店・来館の『理由』を作る装置
 - ② 中央で分散 ＝ 人の『流れ』を生む装置
 - ③ ランドマークで回遊 ＝ 行動を『維持・拡張』する装置
- ＋ サイン＝ 行動を迷わせない補助装置

■結論

空間は点ではなく、①→②→③の連続した「行動設計」として構成されている

→ 人の動きは自然発生ではなく、構造によって意図的に生み出されている

○業務への転換

“構造として人の動きを設計する”

今回の海外研修を通じて得た最も大きな気づきは人の動きは偶然に生まれているのではなく構造によって設計されているという点である。

美術館や商業施設では、来館者・来店者が自然に動いているように見えても、実際には、以下の構造があり、その構造によって人の行動が生み出されていた。

①期待形成

②分散

③回遊・行動+サインによる補助

これは空間だけの話ではなく、自分たちの業務、特に**案件進行**や**現場運営**にも置き換えられる視点である。

○今後の提案に向けて

“ブランド価値を、人が動ける空間構造へ”

今回の研修で得た学びは、空間づくりは「見た目を整えること」ではなく、
人の感じ方や動き方まで含めて設計することだという点です。

欧州の施設では、入口・導線・ランドマーク・サインが連動し、
人が自然に動ける構造がつくられていました。

この視点を、当社の売場づくり、POPUP、展示会、内装提案にも活かしていきます。

今後は、ブランドの思想や世界観を読み解いたうえで、何を最初に見せるか、
どこへ誘導するか、どこで立ち止まってもらうか、どのように回遊してもらうか、
を設計し、ブランド価値と人の行動をつなぐ空間提案を目指します。